

テーマ「高江ヘリパッド建設反対闘争に参加して」

話題提供 近藤ゆり子さん（市民活動家）

メディアでは、いまだ報道がごく限られ伝わっていない沖縄の現状。日米安保条約の下で安部政権が強行に進めている普天間基地の移設・辺野古新基地建設とともに、伊江島の飛行場の拡張、さらに今回の東村高江のヘリパッドの建設が住民の反対運動を強権的に弾圧し強行されています。

サロン九条では、吉田（千）さんの司会で、先月末に現地闘争に参加された近藤さんのスライドを示しながらの生々しい報告を受け話し合いました。参加者は19人。

報告のはじめに、報道ステーションで放映されたライブ「やんばるの森で一体なにが起きているのか」のDVDを皆で見ました。高江に続く道路にぎっしり並ぶ警察車両、サングラスをかけた民間警備会社員や機動隊員の壁が写され、反対住民や支援者への威圧が伝わってきます。安部政権は沖縄において先の参議院選挙で現職の島尻沖縄北方担当大臣が落選し、政権与党が敗退し、沖縄の民意が圧倒的に示されているにもかかわらず、翌日には高江への資材搬入を始めています。映像は7月22日、本土から押し寄せた警視庁など500名以上を含む1000名の機動隊によってヘリパッドに通ずるゲートが開かれ、県道封鎖、戒厳令状態の中の権力による暴力的な排除の騒然とした模様が映し出されました。一人一人が、抗議の声をあげている島民が引き抜き排除され、3人が救急搬送されたことを伝えていました。映像は平穏な沖縄北部「やんばるの森」に住むわずか150人の集落の自然と生活を破壊し、米軍海兵隊のオズプレイ出撃基地・ヘリパッドの建設を強権的に進める政府権力者、そしてこの建設が20年前にさかのぼる1966年、日米両政府の合意によること、隠されていたオズプレイの配備など暴政を告発していました。

そして、高江の住民の声を伝えています。日本政府は「沖縄の基地負担を軽減する」とか、「丁寧に説明する・住民に寄り添う等と言っているが言っていることとやっていることが違う」、世界の中でやんばるでは「命が停止されている」、「命の価値観が低い」と訴えているのが印象的でした。

そしてディレクターは最後に国のやり方はますます高圧的、強行になっている。今度の内閣改造後では基地負担と沖縄振興予算はリンクしていると180度違った態度をしめし、まるで飴とムチの使い分けをしている。“いじめ”の構造を見ているようだと言っているのはささやかれていると。そして、これはいじめる側といじめられる側の問題ではなく、この現状を見ていて見ぬ振りをしている傍観者の問題や、本土に住む人間の無関心が問われていると結んでいました。

DVDのあと、近藤さんは参院選後、本土から押し寄せた警察・機動隊員1000人が住民の強い抗議を押し切り、戒厳令状態のなか、暴力的に建設工事を強行したことを報告。

「住民や支援にきた人たちが『高江ヘリパッド建設反対』などのプラカードを高く掲げて抗議しているのに、防衛局の職員や警備員がカメラで写真をとり、暴力的に排除するなど異様だ」と語りました。近藤さんの話を聞いた50代の女性は、「選挙でオール沖縄が勝ち続けているのに、政府は『話し合いを続ける』とか『負担軽減』とか言って強行するのはひどすぎる」と安部政権に怒りを込めて語りました。

初めて参加した女性は「沖縄は5年前に行き、沖縄戦跡のひどさを肌で感じた。岐阜で自分に何かできないかと思い参加した。沖縄の現実をもっと知りたいし、たたかっている沖縄の人への支援を続けたい」と語りました。他の参加者からも「実力行使をしているのは政府であり、法を無視している」「まず集まって悩みや分からないことを共有して始め

ることは大事」などの発言が続きました。

近藤さんは、「改憲勢力が3分の2を越えたからといって、たたかいは『国会の議席数』で決るわけではない。状況を変え突破する市民のたたかいにこそ道理がある。国民の不断の努力を定めた憲法12条を、今いかすときだ。沖縄のたたかいに学んで、改憲を許さないたたかいを広げよう」と結ばれました。